

## 8. 震災による衣生活の変化とその問題点

中川早苗

(奈良女子大学生生活環境学部)

### 1. はじめに

人間主体・生活優先の成熟社会の中で、生活者が衣服に求めるニーズも量から質へ、ものからころへと変化している今日、衣服を人間や生活環境との適合という視点からより総合的にとらえることが衣の分野における課題となっている。

本研究では、大震災によってそれまでの生活とは全く異なる生活を余儀なくされた被災者へのインタビューや質問紙による調査を通して、被災直後から今日に至るまでの時間の経過の中で生じた衣生活における問題点を明らかにするとともに、これからのより望ましい衣生活のあり方について考察してみたい。

### 2. 被災地の家政学会員に対する第1次調査結果

震災後、被災地域に居住する関西支部会員429名を対象に、1995年3月郵送法による調査を行った。有効回収票158で有効回収率36.8%である。家政学会員という、生活するものの視点から考究している有識者を対象に、震災後3ヶ月の時点までに、学会員が生活者として、震災をどう体験し、行動したか、何を感じ考えたかについて自由記述式によるアンケート調査を行った。

その結果を衣の分野についてみると、①被災当初最も困ったことには、洗濯用水の不足があげられている。②震災後の衣生活面における考え方の変化については、シンプルが一番、衣服は機能性が大事、衣料についてもう少し計画性をもって購入したい、衣料を整理して最低の枚数とし今までのものを最大限に利用する工夫をしたい、衣料も収納場所を考え増やさない心構えを持つ、衣料など足りているものはあまり買わないようにしたい、などがあげられている。③災害時に備える、心構えのある生活態度については、活動しやすいことが衣服の原点、就寝時にはすぐ着用できる衣類を備えておく、パジャマやトレーナーなど起きてすぐ行動できるものや作業に適したジャンパーなどを用意しておく、2日分位の下着を常備しておく、などがあげられている。

以上の結果からも明らかなように、震災を機に多くの人が衣類をあまりにも多く持ちすぎたとそれまでの贅沢な生活を反省し、衣類は計画的に購入し必要最少

限にして持っているものを最大限に利用する工夫をする、不要品を整理・処分し増やさないようにする、などできるだけシンプルな生活をしたいと答えており、震災から多くの教訓を学んだ様子が見える。

### 3. 被災地の家政学会員に対する第2次調査結果

第1次調査時に継続調査の協力を得た会員70名を対象に、1996年1月郵送法による調査を行い42名から回答を得た。調査内容は、震災後1年経過した時点における問題点や1年を経たの感想、意識や考え方の変化などで、自由記述によって意見を収集した。

衣生活や衣料のあり方についての問には42名から回答を得た。性別をみると男性9人、女性33人、年齢構成は20代4人、30代6人、40代8人、50代6人、60代15人、70代2人、80代1人である。なお衣生活のあり方については、回答内容を購入、着用、収納、再利用、廃棄に分けてまとめた。

#### (1) 衣生活のあり方

##### a. 購入

落ち着くとおしゃれがしたくなり購入（51歳女性）

復興が進むにつれ購買意欲がわいてきた（28歳女性）

バーゲンで不要なものを求めてしまう（69歳女性）

興味がなくなり神戸での買い物にも興味がなくなった（55歳女性）

本当に必要なものは数少ないと感じた（28歳女性）

##### b. 着用

避難所での衣服の着替え（プライバシーが守れない）。

流行を追いかけず色の調和さえとれていれば動きやすく怪我しない服装がよい。

帽子、長袖、長ズボン、膝までのコート、ペチャンコの靴などで充分。和服は貸衣裳がよい。個人の私有を控えて社会的利用をすすめる家政学には（66歳女性）

流行遅れは着ない、着物の着用も考え中（65歳女性）

##### c. 収納

タンスは危険、衣類は多種多様で多すぎるし、所持している洋服数もおびただし

い（65歳女性）

伝統としての和服の保存と活用（64歳女性）

d. 再利用

再生利用のプロモートをする常設のシステムが必要（69歳男性）

中古は人にあげにくいし、リフォームしたい（65歳女性）

e. 廃棄

数少なく整理したいが捨てにくい年齢（65歳女性）

f. 総括

ぜいたくすぎる（86歳男性、64歳女性）

あふれる衣料を何とかしたいが職業柄やむを得ない。簡素にする方法を考える（64歳女性）

g. 非常の際の備蓄衣料

個人も国も災害に適したものを常備しておくことが必要（性別、年齢別、サイズ別下着や衣服等）、作業に適するジャンパー（雨、防寒）、セーター、トレーナー、カーディガン、くつ下、ソックス、手袋（軍手）、毛布 風呂敷、スカーフ、手拭い、タオルなど（74歳女性）

おしめ（幼、老）、生理用ナプキン等の常備（66歳女性）

災害対策設備衣料として効率的な耐寒衣料の開発が必要（64歳男性）

（2）衣料のあり方

女性の衣服や靴がいかにかに活動的でないか、震災直後だけでなく現在もこの思いは続いている。スカート、ハイヒールをフォーマルな衣服とする規範は何なのか？と考える（46歳女性）

衣服の暖をとるという機能は、もはや真冬でさえお呼びでないことを再確認した（64歳男性）

衣服のカジュアル化が役に立った。カジュアル衣料のさらなる充実が望ましい（65歳男性）

和服・洋服のあり方を再考すべき（66歳女性）

（3）救援物資について

#### a. 配布の問題

あまり困っていない人へも配布があつて、あまり喜ばれていない面もあつたように思う（52歳女性）

配布の公平さ、望まれているところに配布されていない（74歳女性）

配布ルート of 組織作りが必要。搬入の敏捷、流通ルートの確保をしておく。

サイズや好みが複雑なので無料のみの市のように自由に選んでもらう形式がよい（49歳女性）

ワコール等業者からの救援、特に肌着、毛布等が必要。

新品でも安物はダメ、生活水準に合った救援（64歳男性）

お金さえあれば買えるので救援物資としては無駄が多い（62歳女性）

#### b. 古着の問題

なかなか合うものがなく見向きもされていなかった。

性別、年齢別、種類別、サイズ別など細かく分類することが必要（26歳女性）

きれいに洗濯したものを（31歳女性）

ゴミに等しいものを送る人のモラルの欠如、あればいいという状態ではないことを認識すべき（41歳女性）

「10枚の古着よりも1枚の新品」サイズや趣味に合わないものは緊急時以外は着たくない（33歳女性）

ダンボール何杯もの衣料が余っていた（63歳女性）

以上のように、災害直後とやや落ち着いてきた1年後とでは衣生活についての考え方にやや変化がみられることがわかる。震災がこれまでの衣生活を反省し、より望ましい衣生活のあり方について考えるきっかけになったことは前述の通りであるが、今回の調査結果を見ると、喉元過ぎれば熱さ忘れるの諺通りまた少しずつ元の衣生活に逆戻りしつつあるような感もあり、前回の調査結果であげられたようなことを実行に移すにはどうすればいいのかについて考えることが今後の課題であろう。

## 4. 災害復興住宅「三国住宅居住者」に対する調査結果

### (1) 調査の目的と概要

震災が衣生活に与えた影響や震災による衣生活の変化と問題点を明らかにするために、豊中市営の災害復興住宅「三国住宅」居住者に対して、震災前と震災直後、避難所、仮設住宅、現在の災害復興住宅に至るまでの衣生活の変化と問題点について質問紙による調査と聞き取り調査を行った。質問紙調査については自治会を通じて280票配布して回収は47票（回収率16.8%）に留まった。回答者の年齢分布は20歳代以下2、30歳代1、40歳代5、50歳代10、60歳代25となっている。

## （2）主な調査項目

震災前の衣服の所持状況と収納場所、震災による衣服の被害状況、震災直後の衣服所持状況と必要とした衣服およびその入手方法、救援物資の利用状況と利用や配布における問題点、避難所および仮設住宅での衣生活（衣服の入手・着替え・収納・洗濯）で困ったこと、現在の災害復興住宅での衣生活で困っていること、現在必要としている衣服、震災前との衣服所持数の比較、今回の災害で気付いたこれまでの衣生活における問題点や反省すべき点、災害に備えて日頃から心がけておくべきことや準備しておくべき衣服の種類や枚数。

## （3）調査結果（表1～表24）および考察

- 1)震災前の衣服の所持状況については、必要以上に持っていたと答えた人が36.4%を占めており、有り余るほどの衣服を所持していた人が多いことが伺える。
- 2)震災前の衣服の収納場所については、洋服ダンス、整理ダンスが70%以上、和ダンスが50%弱で、転倒の危険のない作り付けダンスやクローゼットは10%に満たない。その他には衣裳ケースや衣裳函、押入などがあげられている。
- 3)震災による衣服の被害状況については、30%弱の人が半分ほど被害を受けたと答えている。
- 4)震災直後の衣服所持状況については、衣服が不足して困ったという人は10%弱で、半数の人が全く困らなかったと答えている。建物が倒壊しても衣服は持ち出せたためあまり困らなかったようである。
- 5)震災直後必要とした衣服については、真冬であったことから防寒着と答えた者が72.7%と最も多く、次いで下着54.5%、履物48.5%、普段着39.4%、寝衣30.3%で、外出着や仕事着などは10%～20%である。その他で、寝衣を必要とした理由

については飛び散ったガラスのかけらが寝衣についたから、寝衣を必要としなかった理由についてはいつでも逃げられるように普段着を着たままで寝たからという説明がなされている。他の報告にも見るように震災直後しばらくはいつでも飛び出せるように普段着のままで寝た人が多かったようである。

6)震災直後必要とした衣服の入手方法については、50%弱の人が購入と答え、30%強の人が救援物資を利用、25%の人が親戚や友人・知人にもらうと答えている。

7)救援物資（衣服）を利用した人の中で、救援物資がとても役に立ったと答えた者が42.1%、少し役に立ったと答えた者が52.6%と90%以上の人が役に立ったと答えている。

8)救援物資を利用しなかった人は、その理由に31.3%の者が欲しいものがなかった、12.5%の者がサイズが合わなかったをあげている。また救援物資が流行遅れであったり品質が悪くなかったり、汚れてたり色あせていたからと答えている者もいる。37.5%を占めるその他には、救援物資の支給があることを知らなかった、情報が届かなかった、通知がなかった、支給がなかったなど情報が十分に伝わらなかったことや足りていた、必要なかった、あるもので十分だった、利用するほどでもなかったなどがあげられている。

9)救援物資やその配布方法について、自由に意見を記述してもらったところ、下記に示すような多くの意見が寄せられた。

- ・自分だけがわいわい抱え取りして、私達の手には入りませんでした。
- ・仕事に行っていたので残り物ばかり。
- ・サイズとサイズの合う人を並べて配布するとよい。
- ・汚れたまま出していた。
- ・不要品処理のような感じ。
- ・お世話して下さる方に迷惑。
- ・タオルや下着、ストッキング等は新品だったので喜ばれた。
- ・情報不足。どの様にして配布しているのかわからなかった。
- ・年寄りなどに救援物資が届きにくかったように思う。

これらの意見をまとめてみると救援物資を送る方のモラルや思いやりの欠如、

配布通知の不徹底、配布方法の不公平さ、貰う方の常識のなさなど、救援物資を送る側、受ける側、配布する側それぞれに様々な問題点があることが明らかになった。

10)避難所での生活において衣生活の面で困ったことを、衣服の入手、着替、収納、洗濯について答えてもらったところ、入手については、やや困ったが13.3%、着替えについては非常に困ったが6.7%、やや困ったが33.3%（仕切りがあまりうまくできていなかったなど）、収納については非常に困ったが21.4%、やや困ったが28.6%、洗濯については非常に困ったが35.3%、やや困ったが29.4%（水の供給が少なかったなど）となっており、避難所での生活では着替え（40%）、収納（50%）、洗濯（64.7%）に多くの人困った様子が伺える。なお洗濯の回数について答えてもらったところ、週に2回が52.6%、週に1回が26.3%で毎日と答えた者は15.8%と少なかった。

11)避難所での生活で困ったと答えた人が一番多かった洗濯について、その理由を答えてもらったところ、干し場所がなかったが68.8%、洗濯機がなかったが50%、洗い場がなかったが31.3%、水が不足したが25%で、困らなかったと答えた者の理由にはコインランドリー使用、洗濯機をおく場所がなかったので共同用の使用、半壊の家にそのまま生活していたので困らなかったなどがあげられている。

12)仮設住宅での生活において衣生活の面で困ったことを、同じように衣服の入手、着替、収納、洗濯について答えてもらったところ、衣服の収納について非常に困ったが25%、やや困ったが46.4%（一間で狭いから、タンスが入らなかったからなど）の計71.4%が、洗濯については非常に困ったが4.3%、やや困ったが（お湯がなかった、知人宅だったからなど）17.4%の計21.7%が困ったと答えているが、入手や着替え（ややと答えた人に外に姿がうつるからがあげられていた）にはあまり困らなかったようである。洗濯回数については毎日が29.6%と避難所での生活に比べて増えている。

13)仮設住宅での衣服の洗濯で困ったことについて答えてもらったところ、干し場所がなかったが28.6%、洗濯機がなかったが21.4%、洗い場がなかったが21.4%で、水が不足したについては0%である。その他には洗濯物をよく盗まれた、野外

での洗濯のため冬寒かった、干し場所が少なく狭かった、干し場所がなかったの  
で早いに物干し台を購入したなどがあげられている。

14)現在の災害復興住宅での衣生活で困っていることについて同じように答えても  
らったところ、仮設住宅での生活と同様に収納をあげているものが68.4%と多く、  
他は0%になっている。その他には収納場所が非常に狭い（奥行55cm）、押入が  
深いと良いと思う、タンスが買えない、押入の奥行が52cmで布団すら入らない、  
家族が6人で家が狭いのでタンスがおけない、4Lだが6・4・3・3畳なので狭い、押入  
が狭いなど、押入の狭さやタンスを置くスペースのないことがあげられている。

15)現在どのような衣服を必要としているかについて訊ねたところ、震災直後には  
10%台であった外出着をあげたものが50%と最も多く、次いで普段着25%、寝衣2  
0.8%、下着16.7%、履物16.7%、アクセサリ8.3%となっている。その他には  
きりがいいという答えもあげられている。

16)震災前に比べて現在の衣服所持数がどのように変化したかを答えてもらったと  
ころ、変わらないと答えた者が46.3%、減ったと答えた者が43.9%、増えたと答  
えた者も9.8%いる。

17)震災前に比べて衣服所持数が減ったと答えた者について、主にどのような衣服  
が少なくなったかを訊ねたところ、外出着が50%、寝衣27.3%、普段着27.3%、  
下着22.7%、防寒着、和服が18.2%、仕事着、アクセサリが13.6%という結果  
が得られた。その他には減った理由について、外出着を盗難にあったから、寝衣  
・防寒着・和服に○をつけた者には家の下敷きになったから、外出着に○をつけ  
た者には収納できないから、着ない物を人にあげたからなどがあげられた。

18)今回の災害で気づいた、これまでの衣生活における問題点や反省すべき点につ  
いて自由に答えてもらったところ下記のような意見があげられた。

- ・きちんと整頓して何がどこに納めてあるか必要な時すぐ出せる様にまとめてあ  
ります。
- ・寒い時期は軽くて、嵩張らず、温かい品が一番。革製品などは役に立たない。
- ・近所に行くにも絶対鍵をかける事。
- ・古い物は整理して少なくする。

- ・衣類については、必要最低限あればよい。
- ・季節に応じてのことですが、長く着れる物、暖かい物、質の良い物。
- ・リュックサックに人数分だけの食料と衣類を入れて用意しておきたいと思う。

これらの意見から、これまでの衣服を多く持ちすぎた衣生活を反省し、出来るだけ長く着ることの出来る着心地のいい質の良いのものを必要なだけ持つことを心がけ、必要なときにはすぐ出せるように整頓しておき、災害に備えての用意もしておきたいと思っていることが伺える。

19)最後に衣生活の面で災害に備えて日頃から心がけておくべきことや、準備しておくべき衣服の種類や枚数について訊ねたところ、下記のような実体験に基づく多くの貴重な意見があげられた。

- ・タオルやバスタオルはなるべく多く備えています。ハンカチや靴下も必要以上に20枚、20足はあります。
- ・水不足による洗濯の不自由さに対応するため、肌着を充分用意しておく。
- ・靴は必ずいると思う。すぐ履ける靴を何足かは出しておくべきだと思う。
- ・下着類が充実（1週間ぐらい）していれば、後は、何とかなる。
- ・{下着2，パンツ2，上着2，ズボン2}×5人分、タオル5、バスタオル3をダンボール箱に入れて、いつでも持ち出しできるように見える所に置いてある。ダンボール箱に持ち出し用と記入している。
- ・肌着は多いほど良い。
- ・シャツ3枚、タオル小2枚、通勤着2組、ショーツ3枚、防寒着1枚、靴1足、長パンツ3枚、普段着2枚。
- ・下着：1週間分／1名 普段着：1着／1名 防寒着：1着／1名
- ・衣類など日常には多くは必要なし、すぐ持ち出せる枚数、各4～5枚あればよしと思います。防寒着は毛布のかわりになるから。
- ・衣類が多すぎた。
- ・持ち歩ける衣服3枚（コート1枚、質の良い服2枚）、下着上下3組。
- ・なるべく綿の品物が良い。どれも3点ずつぐらい用意されると良い。たとえば、下着3点、パンツ3点、靴下3点、服3点と云うように。その時の季節に合わせ

て入れ替えてリュックに入れておく。

- ・下着10枚、寝衣3枚、普段着3枚、防寒着2枚、仕事着3枚、外出着3枚。
- ・心がけておくことは問33と同じ。準備する枚数、スラックス春夏秋冬2枚ずつ、スカートも同じ。
- ・防寒着、パジャマ。
- ・下着、普段着、着替え数枚準備。
- ・これとってしていない。

以上の意見をまとめてみると、日頃から心がけておくべきこととして、やはり多くの人の不意の災害に備えて最小限必要な衣服をまとめて目につくような所に置いておき、いざという時にすぐに持ち出せるようにしておくこと、履物についてもすぐ履ける靴を何足かは出しておくことなどをあげている。”災害は忘れた頃にやってくる”といった諺があるが、忘れた頃にやっても困らないように普段からの心がけが大事だと言えよう。

また災害に備えて準備しておくべき具体的な衣服の種類や枚数については、家族の人数や年齢などに応じて様々な意見があげられているが、集約するとおおよそ一人につき下着類（シャツ、ショーツなど）を一週間分、普段着上下2着、防寒着1着、勤めている人については通勤着上下2着、ハンカチ3枚、靴下3足、タオル・バスタオルを各2枚、手袋や帽子靴を用意しておけばいいようであるが、いざという時に一人で持ち出せる分量や重さも考慮しなければならないであろう。

#### （4）まとめ

以上、震災が衣生活に与えた影響や震災による衣生活の変化を、震災前と震災直後および避難所を皮切りに仮設住宅を経て現在の災害復興住宅に至るまでの過程でみてきたが、震災が衣服その物に与えた被害は思ったよりも少なく、30%弱の人が半分ほど被害を受けたと答えている。また震災直後必要とした衣服についても、購入したり救援物資を利用したり親戚や友達に貰ったりして手に入れており、不足して困ったと答えた人は10%弱と少ない。30%強の人が利用したと答えている救援物資については殆どの方が役に立ったと答えており、送る側、受ける側、配布する側に様々な問題点はあるものの非常時における衣服の調達方法とし

て有効な手段といえる。今回の調査で明らかになった救援物資に関する問題点についてよりよい解決方法を考えることが今後の課題である。

## 5. おわりに

被災者へのインタビューや質問紙による調査を通して、震災が衣生活に与えた影響とそこで生じた様々な問題点を、被災直後から今日に至るまでの時間の経過の中でみたところ、避難所での生活では、着替える場所がなくてプライバシーが確保出来なかったことや水不足で洗濯が出来なかったこと、洗い場や干し場がなかったこと、衣服の収納場所がなかったことなど、狭い空間での生活を余儀なくされたことによる多くの問題点があげられた。仮設住宅での生活では、着替えの問題は解消されたものの、洗濯や収納の問題は依然として解決されず、洗濯については野外での洗濯であったため冬寒かったことや洗い場や干し場が不足したことなどがあげられた。また最後に終の棲家になるであろう現在の災害復興住宅での衣生活で困っていることについて答えてもらったところ、仮設住宅に比べれば広くなったとはいえ、押入の奥行きが狭く布団すら入らないことや部屋が狭いためタンスを置くスペースがなく衣服の収納場所がないことを7割近い人があげており、震災前に比べて衣服所持数が減ったと答えている人が半数近くいるにも関わらず、収納の問題が依然として解決されていないことが明らかになった。今回の震災では家具の転倒による被害が多かったことが問題になっていたが、災害復興住宅にはそのような問題の解決がなされていないことが明らかになった。

震災を契機に多くの人々がそれまでの衣生活について、必要以上に衣服を持ちすぎたことやきちんと整理収納できていなかったことを反省し、これからはいいものを必要なだけ持つことを心がけ、必要なときにすぐに取り出せるようにきちんと整理しておきたいと思い、また不慮の災害に備えて準備しておくべき衣類についても貴重な意見を沢山あげているが、「喉もと過ぎれば熱さ忘れる」にならないように、震災から得た教訓を今後の衣生活にどのように生かすかを考えることが衣の分野を研究の対象とする研究者にとっての重要な課題であろう。